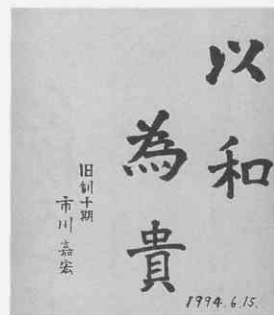


能代高校と私——忘年会——

旧制十期 市川 嘉宏



能代高校と私とのつき合いは長い。我が家が樽子山（現若松町）へ転住したのが、大正十四（一九二五）年秋である。新設能代中学校が、新築工事の最中であつた。小生四歳の年である。その頃以来昭和九（一九三四）年三月入学するまでの間、校庭は我が家の庭のようなものであつた。入学以来卒業までの五年間と、昭和二十四（一九四九）年十月に、当時能代南高校といつた現在の能代高校に勤務し、昭和四十八（一九七三）年転任するまでの二十三年とで、前後二十八年間お世話になったことになる。生徒時代は勿論忘れ得ぬ想い出も多々あるが、それは他に譲るとして、今回は教師として着任した当時のことを述べてみたい。

私が能代高校に勤務したのは、二十年來住み慣れた樽子山から、事情があつて現在の西大瀬に転居した直後であつた。高校に定時制制度が施行されて二年目の年である。校長は岐阜県出身の関谷嘉門先生、定時制主事は九州出身の横川半治先生であつた。その外、谷内卯吉先生、柳谷了因先生、大高芳雄先生、嶋津健助先生（故人）が居られた。これ等の先生方には、大変お世話になったものである。当時は学校の

先生のなり手がなく、特に高等学校は不足していた。かといつて誰でもよいわけではなく、教員の免許状がなければできないが、幸い私は、旧制師範学校、中学校、高等女学校の教員免許状を取得していたので切替えが出来た。旧大学、旧専門学校出身者の復員軍人も多く、それ等の人びとが、自分の専攻教科目を生かす仕事といえ、教師になるのが一番手っ取り早かつたわけである。アメリカの占領政策で、重工業は全面ストップさせられていたので、戦時中（昭和十七—一九四二年）卒業と同時に自動車会社の製鋼部に就職し、同時に軍隊に入つた私達は、復員と同時に離職したのであつた。私の教師としての第一歩は、高邁な理想と抱負があつたわけではなく、生きんがための手段でしかなかったのだが、人に物を教えるということは、自らが勉強しなければならなかつたし、三か月間大学へ内地留学などして、それなりの努力はした。教室ではもっともらしく「これからの日本は、働きながら学ぶ、君達のような勤労青年者が必要である」というようなことを言っていたような気がする。そんな先生であつたが、生徒達は立派であつた。こうした生徒と接していると、私自身もやっぱ真剣に取り組まざるを得なくなり、つい授業にも身が入つたものである。

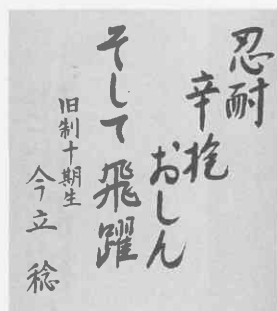
その頃全日制と定時制は、校長の方針で職員会議など一緒のことがままあつた。終戦後四年、前述のように戦場からの復員者も多く、多士済々であつた。その年の忘年会も全・定一緒であつたが、酒も肴もなかなか手に入らない時代であつたし場所もない。結局職員室の机上を整理して宴会が始まつたわけである。酒肴は若い先生方が手わけを

しての買い出しであった。まだ戦後の気分が抜けず、どこか世の中に
対する不平不満というものが誰にもあったのであろう。酒が入るとつ
い本性が出て、大討論会が始まる。そのうちに本が舞う、弁当箱が飛
んでくるで油断がならない。時には組討ちが始まる。気の弱い先生方
は大抵その頃迄は解散してしまっているが、残っている人は、当事者
でなければ扇動者になる。さすがに窓ガラスを割ったり、物品を破壊
することはあまりなかったが、終わった後の職員室は台風の通り過ぎ
たような状態になる。それでも次の日は、何事もなかったように大火
鉢を囲んで和氣藹々、昨夜の反省会に花を咲かせ、まさに「以和為貴」
を地で行っていたような気がする。今から想うと、夢のような時代で
あった。四十五年前の話である。

(元花輪高校校長)

全校スキー行軍

旧制十期 今 立 稔



思い出と言っても、なにせ六十年前の
ことなので、余程印象深いことでないと
詳細に記憶していないので、記念誌のよ
うな永久に残る物に執筆することには大
変抵抗があったし、どうしようか大分悩
んだのであるが、折角の機会を与えて下

さったのだし、この依頼状を見た瞬間ふっと頭に一番先に浮かんだの
がスキー行軍のことだだったので、その思い出を綴ることにした。

さて書き出そうとしたらあれは何年生のことだったのか、またどん
なコースを進んだのか、はたと困った。いいや、これは実際に経験し
たのだから事実だけ記憶をたどって書いてみようと思いに決め書き出し
た。

私はスキーが不得意で、しかも自分でスキーを持っていかなかった
ので、体育の時間には学校備え付けのスキーを借り、学校の向かい、
今のニチイ裏手の小高く短いスロープ等で、おっかなびっくり、よう
やく滑っていた実力者であった。それがなんと、今思うと学校から今
の東中のある大館台地を鶴形方面へ、登り降りを繰り返し、富根羽立
を経て富根小学校までの行軍が行われたのである(はっきりしたコー
スは不明)。

さて行軍だが、平地滑走は最初のうちはなんとかついて行けたが、
それでも皆に遅れがち、ストックにだけ力が入り、なかなか思うよう
には前に進まない。やがて小高い山にさしかかる。他の人たちはスイ
スイと苦もなく上へ上へと登って行く。こちらは焦れば焦るほど、ス
キーは後戻りするのみ。それでもついて行かねばならない、必死にな
って登ると皆はもう下りにかかっている。見るとなかなか急である。
怖いので目をつむりながら一気に滑り下りる。そんなことを何度も繰
り返しながら幾つもの山を登り降りした。

今の国道七号線南側、鶴形の山から富根の平地へ出る最後の台地に

さしかかった頃、突如猛烈な吹雪に襲われた。一寸先も見えず、動きがとれなくなった。さあ大変、これからどうなるのか不安になった。

しばし様子を見ていたが、なかなかおさまりそうにない。このまま遭難かと心細くなった。先生方も心配そうな姿でなにやら話しあっている様子。私はその前の登りで風が強くなった時、吹雪のなかで帽子を谷に吹き飛ばされ、頭が冷たくなるやら散々。手拭いで頬かむりしてじっと我慢するのみ。そうこうしているうち、幸いにもカラリと晴れ上がった。皆は救われた思いに急に元気づき、一気に山を下った。眼下に広がる田んぼ、こわかった山ともお別れだ。スキーにも大分慣れ、目的地の富根小にやっとたどり着いた。我ながらよくここまで来られたと、不思議で夢のようであった。富根小で御馳走になった豚汁のおいしかったことは格別で、今でもその味をはっきりと覚えている。富根から機織までは汽車で、駅から学校まではまたスキーで帰ったようである。やれば出来るということをもっと体験した素晴らしい行事であった。

この行事はその後途絶えたようで、七十年の歴史でただ一回だけの貴重な行事ではなかったか。原稿が出来上がってから同級生からあれは三年生の時だったと知らされた。

(元東雲中学校校長)

思い出として

旧制十一期 山田 顕一



能代高校が七十周年を迎えた。ふと自分の齢と比べて同じ位だと思った。それでこの七十年ということが長い年月の流れであったとも、また、またたく間に過ぎた短い年月であったようにも思われる。

この間に、昭和十年能中に入学して五年、昭和二十四年新製の能高に奉職して四十二年まで十八年、併せて二十三年間お世話になっていたことを思う時、その在校年数では特に長い方に入るであろうし、またその時期が戦前、戦後に分かれていても、それぞれ能中、能高の特に生き生きとした、明るさの満ちていた時期のように思われる。かなり遠い過去に属する時期でもあるし、齢のせいからもか、能中、能高は五月の若葉の耀く季節の様な記憶として残っている。だが事柄の具体的な記憶はまことに心もとない。

能中入学の年は創立十周年記念の年であった。入学当初よりすでにお祝い気分に含まれて過ごした一年であったように思う。(具体的な様子は以前の記念誌等に詳しいので略す。)農村の小学校から入った私には校門前の鈴懸の坂道、窓は上下に開閉するまだ新しい校舎、校庭やグラウンドに敷き詰められた芝生の、裸足で走っても足裏の汚れた

い様な美しさ等、そして先生達は皆威厳に満ちていた、こうした入校当初の印象が特にありありと残る。そして十月の記念式典がピークであった。まだ戦争の翳りも戦後の荒廃もない、能中少年期の誕生記念日の輝きであった。

その会場でもあり、剣道の時間に正座させられたりもした体操場の側面に「至誠」の額がかかっていた。「至誠力行」は在学中事ある毎に訓えられた。ところが、戦後何回目かの記念式の準備の為であったか「能高の校訓ってあったかな」という話が職員間で出たことがあった。その時即座に能中の先輩である先生が「至誠力行」と応えられた記憶がある。してみるとある時期この校訓が忘れ去られて居ったと考えられる。この文を草するに当たって五十周年記念誌を探し出してみたら私の「至誠力行」の書が載せられていた。場違いの篆書で悔いられたが、全く忘れていたものに出会ったなつかしさもあった。この五十周年は能高第三の誕生で、全くの新しい空間、その爽やかな風の中に生まれた。その後校地環境整備に学校、同窓会の努力が続けられている様子を、今は隣りと言ってよい程近い距離になって、日頃目にしていた。今度の七十周年を期して見事に完成されようとしていた時期に、同窓会の要請でまた「至誠力行」を揮毫することになり、学校正面の巖に嵌め込まれた。分不相応で恐縮の至りであるが、またありがたいと感謝している。

能高奉職の初期の頃文芸部の係を数年受け持った。部員は皆明るく熱っぽい文芸少年であった。短篇、詩、俳句等を持ち寄り「松陵」を

発行した。今はもう停年退職に近い人達である。私が学校を退いてずっと後であるが、武田君から句集が贈られた。また二、三年して野呂田君からも句集が届いた。やはり心の灯を絶やさずにやっているんだなあと感を深めた。今年になって宮腰（旧姓）さんから同人誌が来た。すばらしい詩が載っていた。プロの詩だ。読み続け書き続けて来られた歳月の中に「松陵」の心が流れていたであろうか。（元本校職員）

波瀾万丈の青春

旧制十二期 長岡幸作

昭和十六年の陽春三月に、懐かしい能中校舎、校門前の「すずかけ」の並木をあとにしてから、早いもので五十四年を迎えました。四年前には卒業五十周年記念行事として、亡き恩師や学友二十六名の慰霊祭を、学友の花下哲夫住職の白龍寺において挙行し、総会、懇親会はプラザ都で開催し、旧校歌、遠征歌、凱歌等を声高らかに歌い、談笑のうちにもっぱら能中時代の青春の思い出を語り合いました。翌日は火力発電所、はまなす画廊や能中校舎跡地、能代高校新校舎として落合の能代野球場、海水浴場等の市内見学をしました。その案内役を進んでつとめてくれた畏友鈴木音安君（プラザ都会会長、市消防団長、前野球協会会長、市観光協会副会長等）が平成五年十一月、全国消防団長会議から帰能後の翌日急逝し、いつも笑顔で「どうもどうも」と声を

掛けてくれた親友を失い、「人生のはかなさ」をいやおうもなく思い知らされました。能高創立六十周年からの十年間で、鈴木君を始め鶴形の小笠原君、鹿渡の牧野君、常盤の幸坂君、浅内の保坂君以下十三名の学友を失い、あまりに多いのに驚かされ、他の学友達は「恐怖の十年」としてますます自重自愛を誓い合い、会うたび毎に「元氣か」と声を掛け合うほどでした。

私達の五年間の能中時代は、臨戦体制下にあつて、制服も国防色という時代でありましたが、文武両道に青春の血を燃やし、学業にスポーツに輝かしい一ページを残した時期で、能中の名声を県下に高めるとともに、学友はそれぞれ心豊かに青春を謳歌し、それぞれ人生の指針となるものを得たと思います。

当時二年生以上の生徒は、運動部を中心に、運動部・文化部のいずれかに必ず所属し、運動部の選手であっても学業不振者は退部させられる状態でした。スポーツにおいては、野球部が全県大会で準優勝し、奥羽大会（秋田、青森、岩手）へ初めて出場して準優勝を勝ちとっています。柔道部は全県大会で秋田商業に惜敗ながらも準優勝し、昭和十四年の全日本選手権大会では、二期生が主力メンバーで初出場ながら準優勝の輝かしい戦果を残しています。体操部は全県大会で優勝、第十一回全県大会では秋田県チーム編成であったが、前年同様全国優勝を目指して健闘したが、残念ながら四位に涙をのみました。バレー部は全県大会に優勝し、華やかに、「能中のバレー部」として全国大会に駒を進め、剣道部は県北大会で優勝していますが全県大会では本

荘中学に惜敗しました。変わったところでは、全国国防競技大会出場の秋田県チームの選手十五名中十一名を能中生でかため、種目別で三種目に優勝しています。

また、学業においても卒業生八十二名の内、東大、東北大、九州大、東京外語大、海軍兵学校、慶応大各一名に、早稲田大四名等を始め、国公立大は十八名で、私立大二十七名の大量進学を果たし、能中の名声をますます高めています。

一方では開校以来二度目という学園ストライキを強行し、五年生の二期生全員が藤山牧場で氣勢をあげたが、一人の犠牲者も出さずに、七項目の要求を解決している。

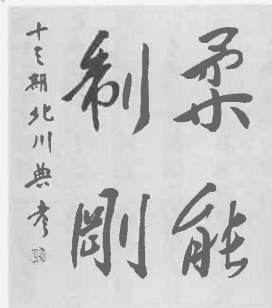
太田口先生の計画された機織—二ツ井間の山岳雪中行軍は、二月の猛吹雪にあい、太田口先生を始め、けが人が出たり凍傷者が出たりして帰宅が遅れ、父兄も騒然となって、翌日の新聞に報道されるなど大騒ぎになり、翌年からは中止している。また二泊三日の修練農場での体験学習や東雲飛行場の新設滑走路建設の「もつくり」勤労奉仕、県北中学校合同演習の強行軍や「十六里強歩」（現在は十里強歩）等、「自分への挑戦」という面でも人生に何度とはない体験をし、今となっては懐かしい思い出となっています。能高創立七十年にあたって、能高健児のますますの健闘と母校の発展を心から祈念いたします。

「明日は散りなん花だにも力の限り今ひと時を咲く」（九條武子歌）

（元本校職員）

小さな松陵健児

旧制十三期 北川 典彦



中学三年進級と同時に、機織での下宿生活をやめて、排球部で合宿したことのある校舎西側下の寄宿舎に入舎する。そこには同期生が四名おり、歓迎してくれた。太田口政治先生が舎監長で、相場鉄蔵先生、須田定基先生、中森増三先生が舎監であった。朝の起床から食事、学習、就寝、外泊等規則正しい生活であった。寄宿舎は、松林の中に在り、近くに梨畑、いちご畑等があり、畑主は私たちに寛大であったように思う。環境は非常によく、寄宿舎生活を満喫できたと思っている。三年間の短い期間ではあったが、懐かしい想い出を紹介したい。

(一) 三年生の秋深い頃だったと思う。土曜日に帰宅(上岩川村)し、雨降る日曜日四時半頃能代駅に着くと、太田口先生が傘を持って迎えに来られた。「先生どうしたのですか」と尋ねると、「大きな雷が鳴ったろう、心配して来たのだ」とのこと。実は入舎のとき、舎監長と面接のとき、田舎で落雷の恐ろしさを見てから、雷恐怖症であることを報告しておったので、心配してお迎えくださったのだとわかって、心から感謝申しあげた。

(二) 四年生のときであった。寄宿舎の粗食(予算の関係か)は有名であったが、排球部の練習も厳しいので私は意を決して畠兵商店から赤玉ワインを購入し、部活終了後帰舎してからこっそり栄養剤として服用をしておった。ところが、中森舎監にその秘密が知られ調べられる。

「食事が悪く、体が持たないから飲みました。」

「うん、わかるがこれは禁止されているのだから、私に預けなさい。」

というわけで没収された。そしてその件は終わり、ご自分が京大サッカーの選手として活躍されたことを熱っぽく話された。励ましのお言葉として有難く拝聴した。

(三) 五年生の時、二年生の寺山君(京大卒)と同室になる。私が排球部の練習に現を抜かしているのを心配して、「先輩、進学の方は大丈夫ですか」とのこと。赤面するとともに、進学に自信を失いかけておった時でもあり、寺山君の直言に反省し、自分なりに努力できたことを感謝している。

(四) 須田舎監が結婚することとなった。この朗報は全員に知られた。興味津津である。舎監のフィアンセが用事で寄宿舎に来られた。生徒一同大騒ぎ。あまりのことに舎監も立腹される。夜九時、恒例の正座で反省となる。説教、はやした者は? 等々、犠牲者を出さないのが寄宿舎のしきたりである。足が痛くなる頃、後ろの五年生から合図が出る。一年生が泣く。二・三年生は声を詰ま

らせてもらって謝る。四・五年生は「自分たちが悪いのですから罰を受けます。下級生は許して下さい。」と謝る。先生は大いに御満足、心よく全員を許されたのである。

寄宿舎の歴史も本校の歴史の一つであると思っているが、資料はあるのだろうか。是非整備して全貌が明確になるよう期待したい。特に寄宿舎生の中には体育面に活躍した人が多かったことを付記しておく。

初めての強歩大会

旧制十三期 吉 田 敏

六十km強歩大会の始まったのは、吾々が二年生だった昭和十三年の二期で、全員が十三才の、今から思うと子供ばかりであった。校舎には五年生（十期）から一年生（十四期）までの五百名ぐらいの生徒数の学校で、質実剛健の躰を旨とし、心身の鍛練のためにこれを学校行事として毎年実施すると聞いた。

① これは九月中旬から十月上旬に行われた六十kmの、脚の速い者には競争で、反対に脚の遅い人には強歩であって、夜十二時に学校のグラウンドを出走しゴールも同じグラウンドであった。

② 道順は能代→浅内→鶴川→森岳→金光寺→松山→扇田→鶴形→富根→常盤→朴瀬→向能代→能代（ゴール）の順であった。

③ これらの地点の十か所ほどに関門を設け、各関門ごとに最終通

過時刻を定め、その時刻をすぎるとそれから来た者は落伍者として先に進めなくした。なにしろ初めての長距離競歩大会で学校側は最終の者が何時に到着するか全然予想がたたず、一応午後五時を締切りにしたと聞いた。

④ 今のような舗装道路ではなかったので全員草鞋わらじを履き、予備の草鞋を一足持参した。

⑤ 夜出発し午後遅く到着するので、三食分の握り飯（九個→十個ぐらい）を各自持参して参加した。

以上であったが、実施してみたら、最も早く到着した人は六時半頃着き、五能線下りの一番列車で家に帰って行った長距離走者で、最も遅い生徒でも学校側で予想した時刻よりもずっと早くゴールインしたので、教職員全員が驚いていたと聞いた。

前記の①から⑤までの項目は、自分で知ったのと、競技部の練習や合宿の時などに部長の太田口先生が吾々部員に話されたのを書き綴ったものである。また、途中で急病や負傷などで進めなくなった生徒は各関門で明るくなるまで休ませ、定期バスやこれのない所は特注の馬車で学校に連れ帰ったと聞いた。

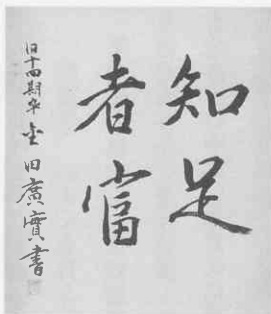
私は富根の橋を渡って常盤、朴瀬と進む一步毎に能代が近くなると思うと苦しいが嬉しく思えた。また、カバンの中の十個の握り飯は一個しか食べられず、残り九個は六十kmのお供に持ち歩き、笑い話になった。ただ、各関門でいただいた番茶や梨はほんとうにおいしく思った。ゴールに入ったのは九時頃で、二番の列車で家に帰った。

以上は二年生の時のものであるが、進級する毎に到着時間が早くなつた。五年生の時は、同じ競技部で長距離を走つた八竜の松森茂男君が優勝したが、その彼は昭和四十年八月（四十才）のある夜、飲んで寝ている時に町内に火事が発生したとき火事場に走って行つたがその場で死んでしまったと私はあとで聞いた。飲んでから泳ぐと死ぬ事が多いのと同じように「急性心不全」であの世に突っ走って行つてしまった。また、彼に次いでこの競走の早かった中距離走者の津田義孝君も飲んでから山越えして自宅に帰る途中、眠って凍死してしまった。二十三才であつた。私の競技部の仲間が二人共突然死んで残念でない。

（よしだ矯正歯科医院）

十六里行軍の思い出

旧制十四期 金田 広美



旧制十四期生が能代中学校に入学したのは、昭和十三年四月、この年の秋、今は伝統的行事となつている十里強歩（最初の距離は十六里で名称も戦時中として十六里行軍となつていた）が始められました。

学校側も生徒もなにしろ最初の事とて、とまどいが多く、装いは体

操用の白長ズボンにゲートル巻き、靴は黒の編み上げ制靴か地下足袋、カバンに二食分のオニギリ、水筒、制帽着用というのが殆どで、従つて大部分の人が走らないで速歩程度であつたと記憶しています。

次の年からは軽装に白ズック（但し、昔のズックはソフトラバーでないで、大きなマメの後遺症に暫く悩ませられた）、その後は、足を軽くして競争できるよう大半が草鞋履きで（履き替え予備二足位を殆どは食べないオニギリと一緒に腰にブラ下げて）走つたものであります。

正零時、号砲を合図にグラウンド（現文化会館敷地）から一斉に飛び出し、出戸沼、浅内、八竜町鶴川（ここにチェックのため検印をもらう関所があつた）、更に山本町の現役場付近の農道を通り、志戸橋、金光寺、大森、檜山を過ぎ、扇田付近で国道七号に出て右折、鶴形、富根橋を渡り対岸へ（早い時間でないとい陽が昇り、対岸を走っている人が見えるのでガックリくる）、天内、常盤、朴瀬、真壁地、向能代へ入り、能代橋（木橋であつた）を渡り、富町を通り、樽子山の校舎正門に入り最終記録所で、終わるという順でありました。途中、志戸橋、金光寺付近は人家も少なく、梟が鳴いたりして、真に淋しいところを通るので、下級生の人達は上級生から離れまいと頑張つて歩いて行つたものであり、又、上級生は下級生を励ましなが、その区間は一緒に連れて走つたもので、人家の明かりが見えるとホッとしたものでした。当時、農家はちょうど秋の収穫期で、稲の足踏み式脱穀機を踏んでおる音が聞こえたものです。

五年生の時、陸上競技部の端っこに籍を置いていたので、当時の体育の先生、太田口（ウマツコ）先生に全部を走り通して記録を狙えと厳命され、仕方なく走り通し真壁地を通り抜けたら数百米前方に、十五期の今は亡き石川清寛君を発見、追ったが遂に追いつけず二位に終わったのが懐かしい思い出であります（タイムは六時間三十九分、石川君とは数分の差）。後輩であり同じ陸上競技部で練習し、あんなに頑丈だった故石川君の御冥福を祈るものであります。

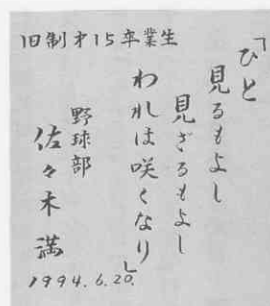
この強歩のルートの各関所には、今でいうPTAや同窓の諸先輩が秋の果物やお菓子をいっぱい並べて励ましてくれたもので、中でも私達の最も人気があったものは、能代橋のたもとで熊谷長栄堂さんが出してくれた羊かんで、これも遅い人はありつけません。羊かんの食べる内に！ が成績のバロメーターでもあったものです。

この強歩も戦後一時途絶えたこともありましたが、再開された距離はつまったものの今に続いているのを聞く時、過ぎし青春の想い、懐かしい学友、同窓の方々の顔、そしてお世話になった尊敬する先生方（大半の方が既に鬼籍に入られております）、数々の想い出を含めて、母校の七十周年に当たり一層の発展と、同窓の諸先輩、後輩の御多幸を心から祈るものであります。

（能代市助役）

母校焼失の痛み

旧制十五期 佐々木 満



昭和十九年三月に旧制能代中学校を卒業した我々同期生は、昨年、卒業五十年を迎えた。五十年といえは決して短い期間ではないが、何か一瞬のうちに過ぎってしまったような感じもする。「何かあれば同期会を」ということで毎年五、六回も集まっている我々だが、昨年夏には、五十周年を記念して、県外在住者の参加も得、夫人同伴の盛大な会をもった。所用のため市内見学、学校視察には参加できなかったが、かつてそこに学び、そこで遊んだ樽子山の旧校舍跡地に立ったときには、皆それぞれの思いにしみりとなり、中には思わず目頭をおさえる者もあったという。

夜の懇親会では、蛮声をはりあげて校歌や応援歌をうたったのだが、そのときには、皆五十年前の少年の顔にもどっていた。しかし、かつて一緒にうたった幾人かの顔が見えないのはいかにもさびしい。考えてみれば、我々は五十年間に、九十四名の同期卒業生のうち早くも十九名の同級生を亡くしているのだ。彼らと結んだかけがえのない友情に思いを馳せ、あらためてその冥福を祈った一夜でもあった。

中学校生活五年間の思い出は沢山あるが、その中で一番悲しい思い

出はやはり卒業を目前にして火災で校舎を失ってしまったことだ。あれは昭和十九年二月十五日深夜の出来事だった。翌日からの試験のための勉強をひととおりおえて、いつものとおり、寝る前の気分転換の体操をすべく玄関前の雪の上に立ったのだったが、見ると南の空が真っ赤に焼けている（私は当時住吉町二丁目に住んでいた）。瞬間、「火事だ、樽子山だ」と思ったのだが、この段階では、「中学校が燃えている」などとは露ほども思わなかった。数年前に一年間だけ樽子山に住んだことがあったので「もしや、あのあたりでは」と思い、マントをかぶって雪道を走った。途中一人増え、二人加わって、樽子山に近づく頃にはかなりの人数になっていた。かつて住んでいた小学校前のあたりは無事だ、火はその向こうだ。あわてて小路を走りぬけて中学校の裏門のところに着いてとび上がった。わが母校が火の海の中にあるのだ。風がないのに火は音をたてて燃え盛っている。消防車が、かけつけた。中学生も近所の人たちもなすすべがなく、ただ呆然と立って紅蓮の焰を見つめるばかり。間もなく、真っ赤に燃えた屋根が一斉に落ちてあたり一面に火の粉が舞い上がった。「銃を運び出せ」と誰かの声。我々は先を争うようにして銃庫に駆けこみ、歩兵銃をかつぎ出してグラウンドの雪の上に並べた。「柔道場が燃えるぞ」と別の声。走りよってみれば、火はまさに別棟の道場に移ったばかり。集まった中学生がかけ声をかけて雪玉を投げつけたが、火はメラメラと屋根一ぱいに広がってしまった――。

それは悪夢のような一ときだった。やがて廃墟に朝が訪れる。テレ

ビはなく、ラジオも珍しい当時のこと、汽車通学の生徒たちは正門の前に来てはじめて校舎の焼失を知って驚く仕末。余燼のくすぶる焼跡で全校集会がもたれた。潮田校長の悲痛な挨拶につづいて、わざわざかけつけてくれた前校長の高橋一郎・大館中学校長が涙声共にくだる大演説をやってくれた。「立派な校舎をすぐ作ってやるから心配するな。天が君たちに試験を与えてくれたのだ。力を合わせてこの試験のりこえてくれ」と。高橋校長のあの演説はいまでも私の耳朵に残っている。

私は、あることに気がついてびっくりした。つまり、それまでの私は、「母校」というのはすぐれて心の中の問題だと思い込んでいた。ところが、「校舎」という建物が失くなってしまふと心の中の「母校」も消えてしまうことに気がついたのだ。「俺の母校はどこへいったのだ」「俺には母校がないのか」――あのときの何ともいえないうつろな気持ちは、五十年たったいまでも私の心の中に消えずに残っている。そして今でも、テレビや新聞などで学校火災のニュースに接すると必ずあのときのうつろな気持ちは胸一杯に広がるのだ。

なお、「色紙」は武者小路実篤のことを借用した。好きなことばである。
(参議院議員)